

三十八補遺 稲作と鵜飼をもたらした人々のお齒黒

黒船来航から明治初期にかけての日本社会の変動を、島崎藤村の『夜明け前』は見事に描いている。叙述は生活・文化にまで及んで、お齒黒の風習が「文明開化」のなかですたれたことまで漏らさない。その一文は、多面的な歴史に関心のあるわたしをインターネットで調べるように誘った。

ウィキペディア「お齒黒」は、その風習が「日本や中国南東部・東南アジア」にあったと述べ、また、日本の古墳に埋葬されていた人骨や埴輪に痕跡があり、『山海経』や『三国志』魏志倭人伝に「黒齒国」が登場することを指摘する。さらに検索するうちに、「お齒黒文化圏に関する試論——日本とベトナムを事例にして」という学術的文献を見つけた。二〇一三年のシンポジウムで発表された日本語の論文で、著者はファン・ハイリンというヴェトナムの女性研究者である。この最近の論文は、これまでの関連する文献に目を通したうえで議論していると思われる。詳細を論じるゆとりはないが、ここでの議論に関係することだけを拾い読みしておこう。

それによれば、お齒黒の風習は、アジアとアフリカの部族や中南米の氏族とにある。

アジアについては、二つの先行文献がお齒黒の行なわれた地域についてまとまった情報を提供するという。一つは、『ベトナムに関する知識』（二九五四年中のP・ユアールとM・デュランの報告で、「南はインドネシア、東はソロモン・マリアナ諸島、北は日本、西は中国南部とインド南部である。インドシナではこの習慣は北緯二十五度付近を越えない」とされる。もう一つは、日本の原三正『お齒黒の研究』（二九八三年で、「南方の黄色人種の大部分が齒牙黒染の風を有していたとうかがい知られる。ただ、大陸民の漢族・蒙古族・満州族・韓族・ギリヤーク族等にその風習がない」と記している。ほかの文献も調べたファン・ハイリンは、「アジアにおけるお齒黒の範囲は、一部の少数民族を除き、北は日本、南はインドネシア、西は中国の広東省、広西省の南部、インド東南部、東はソロモン・マリアナ諸島である」と整理している。

お齒黒は、アジア・アフリカ・中南米と遠く隔たった地域に分布している一方で、それ以外の広い地域に痕跡が見つかっていないので、人類の移動拡散の時代からあったのか、のちに独立に発生したのか定かではない。しかし、日本の古墳やヴェトナムの紀元前第一ミレニアムの遺跡で黒く染められた歯牙が見つかっているという考古学的な証拠

は、この風習が古代からのものだということを教える。アフリカと中南米での部族や氏族という言葉づかいも古い文明段階の風習であることを意味するのだろう。アジアで、近世以後にもお齒黒の習俗のあったことは、この風習が古代から文明化された時代まで続いたことを証言している。

齒を黒く染めて口の中を暗く見せるのは、現代の審美感覚からずれているけれども、後世まで存続したのはその慣習が文化に深くしみこんだせいだろう。日本でその風習を改めるには、欧米人が異なる文明をもちこんだ幕末維新の変動の時代、自他の比較を迫られるのを待たなければならなかった。新政府が皇族・貴族にお齒黒禁止を指令して民間でもすたれることになったが、この変化は、古い社会ではたいい上位層の衣服・化粧などが広まったことを想い出させる。古墳で発掘された人骨のお齒黒の痕跡も、古代日本列島のお齒黒が上層の人々の習俗だったことを示している。

それでは、日本で明治初期まで存続した習俗お齒黒の起源はどこにあるのだろうか。日本列島で独自にお齒黒が始まったのではなく、そのような人体にほどこす装飾がよそから来たとすれば、人が移動して来たのである。従来お齒黒が南方から来たという見方が有力だったのは、アジアにおける近世以後のお齒黒分布地図に基づいてのことだろう。

その地図で日本列島に最も近いところは、中国広東省である。短絡して、古代、遠いそこから直接海を渡って来た集団があったとしても、日本列島にお齒黒を広めるほど多くの人々が来たか疑問である。お齒黒の問題は、日本列島へ渡来した人々を広い観点からとらえて解かなければならない。古代人は装いだけでなく生活手段を携えて移動したはずだから、お齒黒をした人々が何を生活の基盤としたか尋ねることが問題を検証可能にするだろう。すると、蝶の雑記帳第三十八話「鵜飼と稲作の伝来」が「お齒黒の伝来」を解明する光を照射していることに気づく。

第三十八話本文に記したように、水稻の栽培は中国広西チワン族自治区の珠江中流（広東省へ東流する）で始まったことが、栽培稲のゲノム解析で明らかになった。珠江流域に広まった水稻は、北は長江流域へ、さらに東北の日本列島へ、西南のヴェトナム紅河流域へ出た水稻は、西は中国雲南へ、南はインドシナ半島を経て、さらにインド東南部（またインドネシア）へ伝播したのである。注目すべきことは、水稻伝播図が鵜飼をした地域の図と重なることである（鵜飼はインドネシアで確認できなかったけれども）。このことは、水稻栽培を最も重要な産業とした人々が、水量の豊かな水田地帯で有用な食料調達手段の一つであった鵜飼も営みながら移動したことを物語る。この水稻伝播地

図と鵜飼分布地図の二つを、さきほど引用したお齒黒分布地図と比較してみれば、それらに強い連関があることが知られる。ファン・ハイリン論文は述べないが、ウィキペディア「お齒黒」は、中国雲南にお齒黒をしている民族がいると記している。お齒黒分布地図に雲南を含めれば、三つの分布地図はいっそう近似する。すなわち、水稻栽培と鵜飼は、栽培稲発祥の地である珠江中流域を中心として周縁のたがい隔たった三つの地域、東北端の日本列島・西端の雲南・西南端のインド東南部に到達したのであるが、お齒黒の風習もまさしくその三つの地域まで伝播したのである。以上のことは、水稻栽培と鵜飼とお齒黒の三つがセットで伝播したという動態をよく表示している。こうして、第三十八話本文「鵜飼と稲作の伝来」の議論はいっそう強固にされた。高い蓋然性をもって、これら三地域まで水稻を運んだ人々が、鵜飼をし、また、お齒黒もしていたという結論に導かれる。

水稻伝播図と鵜飼分布図にあつてお齒黒分布地図に欠けているのは、広西・広東省以北から長江流域にかけての領域である。それはなぜか、もう一度、この領域の歴史をふり返って考えてみよう。古代、主要農産物が水稻だったのは長江流域以南であり、生産に従事した農民は百越と呼ばれた人々だった。それらの人々は、血統と文化において、

稲作発祥の地の珠江流域の人々とつながっていたと考えられる。だが後世、珠江流域にはお齒黒の習俗があったのに、北緯二十五度以北ではお齒黒が見られなかったのである。ところで、珠江流域周辺には現代でも大きな人口を擁するチワン族などの民族が住んでいるのに対し、北に行くほど住民は自分を漢族と考える。この状況は、かつて百越と呼ばれた同系統の人々はお齒黒をしていたが、華北の強国が長江以南に領土を拡張してきて、お齒黒をしない北方の人々が支配するようになり、「漢化」が進んだせいだと理解できる。

詳しく時代を追ってみよう。春秋時代の紀元前六〇〇年ころ、蘇州から紹興にかけての江東沿海部に呉と越が建国された。『史記』によれば、呉の王は周の王族につながると思われているから、呉の支配者はお齒黒をしない北方の出ということになる。越には、そのような伝承がなく百越の一つとされているから、支配層にもお齒黒の風習があったと考えてよいだろう。紀元前六〇〇年ころ、呉ではお齒黒の風習が押され気味で、越ではお齒黒が一般的だったと推定できる。呉・越の隆盛は紀元前四〇〇年代には終わり、秦の始皇帝が越の会稽山に巡行して以来、華北人による長江以南の支配は体制化されて漢・三国時代の呉・晋へと続き、東晋になると多数の華北人が江南に避難して「漢化」はいっそう強化されたのである。先ほどお齒黒のような装いは支配層の風習になびくこ

とを示唆しておいたが、時代が下がつて南宋以後お齒黒の風習はすたれ、北緯二十五度以北では見られなくなつたと考えることができる。

それに対して、日本列島にお齒黒の風習があつたのはどうしてだろうか。第三十八話本文で論じたように、ミトコンドリアDNAで識別できる水稻種のうち日本で栽培されているのに朝鮮半島で栽培されていない品種があることは、その水稻種が、朝鮮半島經由ではなく、江東沿海部から九州島へ直接渡海したことを示唆する。鵜飼が江東では行なわれたが華北ではほとんど行なわれず朝鮮半島にはなかつたことも、鵜飼をした人々が江東沿海部から渡海したとする仮説を支持する(詳細な議論は第三十八話にゆずる)。

今考えているお齒黒の風習も、華北や朝鮮半島ではそれがなかつたのに日本列島にはあつたのだから、華北や朝鮮半島を通じて来たのではなく、江東沿海部から渡海して来たことを証言しているのである。すなわち、日本に多い水稻種・鵜飼・お齒黒は一致して、江東沿海部から渡海して来たと告げている。

では、日本列島にお齒黒の風習が定着したのはどうしてだろうか。放射性炭素による測定は、九州北部で水稻耕作が始まつたのが紀元前第一ミレニアム初期のころだとする。したがつて、江東沿海部から水稻と鵜飼を携えて来た人々は、呉や越が建国された時代よ

りも以前（稲作文明は十分に発展していた）に九州北部へ渡海したのである。そのころ、江東の稲作民はお齒黒の習慣をもっていたと考えてよいから、九州北部で水稻耕作を始めた諸集団にもお齒黒の風習があっただろう。先進の生産手段をもって移住してきた彼らは、その地で有利な地位を占めて、彼らの文化・生活習慣を広め定着させたと考えることができる。そう考えれば、広域に社会の階層構造が確立した古墳時代、古墳に埋葬された有力者にお齒黒の痕跡があることがすなりと理解できる。

第三十八話本文とこの補遺の議論は、日本列島の古代史や社会構造にも関わって、お齒黒が後世まで続く風習になったことを説明することができる。九州北部で水稻耕作の始まったのが紀元前九百年ころとする新しい知見は、後世お齒黒が江東沿海部ですたれたのに対し、日本列島では定着したことをうまく説明できる点でも有効なのだ。

以上の考察から、紀元前第一ミレニアム初期に江東沿海部から九州北部へ移住して水稻耕作をもたらした人々は、お齒黒の風習をもち、鵜飼をしていた、と推定できる。